

山岡鉄舟（一）

南條範夫



文春文庫

282—1

山 岡 鉄 舟 (一)

定価 400円

1982年 3月25日 第1刷

著 者 南 條 範 夫

発行者 杉 村 友 一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

山 岡 鉄 舟
(一)

南 條 範 夫

山岡鉄舟 (-) 目次

郡代の若様

剣と女

山岡静山

新生活

清河八郎

浪士組

窮境

色道修業

葵は枯れる

345 296 258 225 179 140 99 49 7

山岡鉄舟

(一)

郡代の若様

——新郡代は奥方の尻に敷かれてゐる、

と、陣屋の人たちが、噂をし始めた。

新任の飛驒郡代小野朝右衛門高福が、弘化二年（一八四五）八月二十四日、高山の陣屋に着任してから一ヶ月も経たぬ中にある。

朝右衛門は六百石の旗本で、江戸御蔵奉行を勤めていた。飛驒郡代への転任は、かなりの栄転であると言つてよい。

だが、この時すでに六十の半ばを過ぎてゐる。江戸から遠く離れた土地で、新しい仕事に付くのは、やや億劫であつた。

「もう齡だ、隠居すると言つて、御辞退申上げようか」

上司から内示を受けた時、朝右衛門はそう言つたが、妻のおいそ（磯）は即座に反対した。

「折角の御栄転の機会でございます。お受けなされませ。子供たちの将来の爲にも、是非ともお受けなされた方がよろしゅうございましょう」

「しかし、もうからだも、そう続きそうもないしなあ」

「嘘！ まだまだ、大丈夫でございます」

いそがそう言つて、ちらつと上眼づかいに睨むと、朝右衛門は眼を逸らせて、照れ笑いをした。
「何を言う。わしはもう——」

「いいえ、お齡にしては御さかななことでございます。御心配はいりませぬ」

そう言われても仕方がない弱点を握られている。

「そうか、じゃ、お受けするか」

多勢の家族と家士たちと、総勢三十数名を引連れて、中山道を上り、中津川で道を外れると苗木から北上し、高山に入った。

何もかも江戸にいた頃とは全く違う新しい生活が始まった。

江戸では上司の上に上司があり、その命令に従つて、大体、慣行通りに動いていればよかったが、ここでは郡代が最高の地位にある。何でも自分で決定しなければならないのだ。

極めて平凡な事務官僚である朝右衛門は、最も無難な方法として、とりあえず地元の下僚たちの進言をそのまま鵜呑みにして、仕事に慣れることにした。

従つて、形式的には忙しいが、実質的には大した仕事はない。

むしろ、おいその方が、多勢の子供を抱え、新しい環境に適応する為に必要な一切の仕事を引受けて、一日中きりきり舞いをしなければならなかったのだが、そのおいそが同時に、朝右衛門の公務の上にも、屢々有益な、実務的な助言を与えた。

そうしなければ、事が運ばないのである。

陣屋の人々は敏感にそれを嗅ぎとった。

その中に、町の人々もそれとなく、そうした雰囲気^{リョウカイ}を諒解してきたらしい。

町の中でも、囁きが交わされる様になった。

——今度の郡代様は、どうやら、奥方さまの尻に敷かれなすっていらっしやるちゅう話だよ。
小野家において、下世話に言う、

——かかあ天下

の傾向があったことは、確かである。

そしてそれは朝右衛門が、おいそを妻として貰い受けた時の事情に由来している。

朝右衛門の最初の妻は、子供を生まないで死んだ。そこで遠縁の村上三十郎の子幾三郎を養嗣子として貰い受けたのだが、三十郎が間もなく死んだので、その未亡人を後妻として貰った。

この後妻との間に、鶴次郎が生まれた。
この後妻も、七年後に死んだ。

その後は、妾を置いて、三人の女兒を儲けたが、どうも正室がいないと不便なので、三度目の妻を迎えることにした。これが、おいそである。

おいその父塚原秀平は、鹿島神宮の神官で、常陸ひたちにある小野家の知行地の管理を任されていたが、計数に明るく、有能なので、朝右衛門は自分の用人として来て貰うことにした。

秀平は、出戻り娘のおいそを連れて江戸へやってきて、両国橋に近い本所大川端通りの御蔵奉行官邸に住む。

おいそ、時に二十五歳。

色はやや浅黒いが、長身で、目鼻立ちのすっきりした美人で、気象の鋭い女である。

朝右衛門は、このおいそに惚れた。

塚原秀平に、遠慮勝ちにその意思を伝えたが、秀平は、いい返事をしない。

第一に、年齢が三十三、四も違う。

第二に、腹違いの子女が五人もいる。上の二人はおいそよりも年長なのだ。

「有難い思召しではございますが、娘には少々荷が勝ち過ぎるよう思われますので」

「しかし、おいそは——」

「はい、いそにも話してみましたが、やはりどうも」

秀平は、一応、拒絶した。

拒まれるとなおのこと、おいそが欲しい。

それも朝夕、同じ邸内でその本人を目の前にみているのだから、五十の半ばを超えている朝右衛門も、血が騒いで耐らなかつたらしい。

「どうだ、考え直してくれぬか、決して粗略にはせぬ」

と、今度は直接、おいそに当った。

おいそは、一度結婚に失敗しているだけに、慎重ではあったが、同時に再婚が極めて困難であることも充分に弁えている。六百石の旗本の妻になることは、滅多に恵まれる機会ではない。

父の秀平と相談した上、将来の保証について、朝右衛門に一札入れさせることにした。

朝右衛門が秀平に与えた念書には、次の如く書かれている。

——そこ許娘おいそ事、貰い請て継室と致し候こと実証なり。然る上は生涯我ら引受け不自由がましき儀致させず候……末々俸の代に相成り候とも、粗略これなきよう、申し渡し置き候、天保六年乙未五月、高福

江戸時代の武士が、妻を貰うに当って、

——いつ迄も大事にする、

と言う誓約書を出した例は、ほかにはないであろう。朝右衛門が、いかにおいそに惚れていたかを示すものと言ってよい。

朝右衛門はおいそに惚れている。年が親子ほども違う。そして、おいそは氣象の鋭い行動的な女性である。これだけ条件がそろえば、当然、

—— がかあ天下

とならざるを得ない。

それが醜態の程度に至らなかつたのは、おいその伶俐さの爲であつた。

結婚の翌年、すなわち天保七年（一八三六）六月に、鉄太郎が生れた。つづいて金五郎、鎌吉と、男の児ばかり生れた。

高山に赴任した時には、養嗣の幾三郎以外はすべて引連れていつている。

幾三郎はすでに四十に近く、一家を構えて、幕府御小姓組として出仕していたので、江戸に残つた。

幾三郎は、養父朝右衛門に対して、やや冷い眼を向けつつづけていた。

—— 小野家には自分と言う後嗣がある。自分には子がないが、弟の鶴次郎を養子にすれば良い、おやじ殿はあの齡をして今更、若い女房を貰うことはあるまい。

と、おいそとの結婚そのことに反撥を感じているのだ。

—— おやじは、好色だ、

そう思つてもいる。

朝右衛門が果して好色であつたかどうかは分らないが、その方面の精力は相當に強かつたことは事実であらう。生涯に、男九人、女三人、合計十二人の子女を生ませている。

おいそを貰ってから、その死に至る十七年間だけでも、鉄太郎以下男の兄ばかり六人生まさせている。最後の二人は、七十歳を超えてからの兄であろう。

室町時代、蓮如れんじやうと言う本願寺の偉い坊主は、六人の妻に二十六人の子を生ませ、最後の子は八十四歳の時だったと言う。朝右衛門など、これに比べれば大したものではないかも知れないが、決して精力の弱い方でないことは確かである。

性的エネルギーと仕事の上のエネルギーとが比例している場合もある。蓮如などはその例であろう。

だが、性的エネルギーは旺盛だが、仕事の上では格別目醒めざましいことがないと言う場合も少なくない。その場合、

——律義者の子沢山

と言う現象が現れる。

朝右衛門はこれに近い。

尤もつともらしい顔をして、毎日陣屋の役向きの部屋に坐っているが、大した仕事はしていなかった。

——万事、慣例通りに。それが役目上、ボロを出さない為の秘訣だ、
と言う官僚特有の考え方が定着していた。

朝右衛門の高山赴任が決った時、十歳になっていた鉄太郎は父に向って訊ねた。

「父上、郡代と言うのは、どう言う仕事をするお役目ですか」

「天領とは何か、知っているであろう」

「はい、お公儀（幕府）が直接に支配している領地でしょう」

「そうだ、その天領は、全国に亘って四百三十万石に上るが、その中、大名預りになっている分

を除くと三百五十万石、この土地に対して六十人ぐらいの代官が、お公儀から差し遣わされている」

「すると、代官一人当たり六万石ぐらいの土地を治めることになります」

「うむ、平均すればそうだが、十万石以上の天領が四ヶ所ある。関東、美濃、西国（九州）、飛驒だ。ここには特に郡代が置かれることになっているのだ。わしが任命されたのは、この飛驒の郡代だから、飛驒一国、十一万四千石を差配する」

「それじゃ、十一万四千石の大名になると同じなのですか」
鉄太郎がびっくりして反問した。

「いや、大名ではない。お公儀の役人だ。だが、飛驒一国では、一番偉い地位につくことになる」

朝右衛門は、この点、ちょっと得意でないこともない。

「お前も郡代の若様と言うことになる。今迄のように、やんちゃばかりしておってはいかん」

一瞬、大名の若様になれるのかと、眼を輝かせた少年は、幕府の一地方役人と分って、がっかりした。だが、

——江戸から遠く離れた山国

に対しては、大きな好奇心があった。

そして現実にはやってきたこの高山と言う町は、少年にとって、極めて魅力的なところであった。高山は、標高六〇〇メートルの山間に展かれた盆地である。

町の中央を宮川の清流が、多くの橋を載せて横切っている。遠く碧い澄んだ空には、飛驒の山が町をとりかこむように、列なっている。

町の南、臥牛山上には城址があった。戦国時代に三木自綱が築いた城は、金森長近に亡ぼされ、金森が新領主として、新しい城を築き城下町を展開させた。

金森氏は徳川五代將軍綱吉の時代に出羽上山に移され、高山城は元禄八年、完全に取りこわされて、飛驒は天領となった。

金森長近が、京を真似てつくったと言われている高山の町は、美しい流れと、無数の寺と、落ちついた古い屋並みに恵まれている。

この土地で、十歳から十七歳までを過ごすことができたのは、少年鉄太郎にとって、非常な仕合せだったと言ってよい。

幕政末期の類魔と喧騒とから全く無縁に、のびのびとその若い魂を成長させてゆくことができたのだ。

山国の秋は、急テンポで深くなってゆく。

朝右衛門一家が、どうやら自分たちの急変した日常生活を調整できた頃には、もうこの山間の町は、晩秋の色を濃くしていた。

山野の草木は艶を喪い、蕭々として寂し気になる。

霜が降って、朝夕の寒さが増す。

やがて、江戸では思いもかけなかったきびしい寒さに見舞われるだろう。

だが、鉄太郎は、頗る元氣であった。

異母兄の鶴次郎は、二十五歳以上も年長である。

神経質な気の小さい男で、朝右衛門の秘書役のように使われている。

弟の金五郎は七歳、鎌吉は四歳、どちらも遊び相手にはならない。

鉄太郎は、独りで遊び廻った。

——陣屋の若様

みんなが、そう言つて大事にしてくれる。

増長はしない。

おいそがきびしく戒めているからだ。

——みんなが大切にしてくるのは、お父上の地位に対してのこと、お前が偉い訳ではありません。そこをよく弁えておくがよい。

と言う。

母は怖かった、父よりもずっと。

手をあげることなど勿論なかったし、大きな声を出すこともなかったが、何となく怖いのである。

「母上は鹿島神宮で育つたと言うから、神主のようなどころがあるのだろう、言うことを聞かないと罰が当るような気がする」

と、真顔になって、弟の金五郎に言ったことがある。

そのくせ、この怖い母によくなつき、よく甘えた。優しくて無口な父に対してよりも甘えた。すべての少年は、母親を神の如くに思う時期を持つ。早かれ晩かれ、やがてその幻想は打ち破られてしまうのだが。

ただ、中には、この幻想を死ぬまで持ちつづける者もいる。少年時代に母を喪ってしまった者には、これが多い。